# 看護学生が捉えた小児がんの子どもの家族に対する看護援助

山手美和[1)]、吉田俊子[1)]

**キーワード**：看護学生、小児がんの子ども、家族、ケア

**要　旨**

本研究は、看護学生が小児がんの子どもの家族をどのように捉え、どのような看護援助の方向性を導きだしているのかを明らかにすることを目的に行った。看護学生に対して自由回答式質問紙を配布し、得られたデータは質的に分析を行った。看護学生は、小児がんの子どもの家族を〔孤立しがち〕〔耐えがたい状況〕〔悲しみを抑えている〕〔子ども中心の生活〕〔なんでもしてあげたい〕〔一分一秒でも一緒にいたい〕と捉えていた。また、小児がんの子どもの家族への看護援助として、〔家族の身体的負担の軽減〕〔家族の日常生活の保障〕〔家族に自由な時間を過ごしてもらう〕〔精神的安定を図る〕〔家族の闘病意欲を支える〕〔家族間の思いの表出の調整〕〔同じ疾患の家族との交流を促す〕〔家族としての役割を果たせるように関わる〕〔子どもが笑顔になれるように関わる〕９つを捉えていた。看護学生は、小児がんの子どもの家族の身体的負担の軽減を図れるように日常生活を保障し、また、付き添っている母親だけでなく家族全員に対して精神的ケアが必要であると捉えていた。小児がんの子どもの家族が孤独な状況におかれていると推察し、家族同士の思いの表出や同じ疾患の家族との交流を促したり、闘病意欲を高めるような援助を行っていた。

# A Nursing Student's Perception of Care for the Family of a Child with Cancer

Miwa Yamate[1)], Toshiko Yoshida[1)]

**Key words**：nursing student, child with cancer, family, care

**Abstract**：

The purpose of this study was to describe how a nursing student perceived the family of a child with cancer, and what sort of nursing care she felt necessary. We distributed an open－end questionnaire to a nursing student and analyzed the data qualitatively. The student observed six facts as characterizing the situation of the family of a child with cancer: "they tend to be isolated," "they are in an unbearable situation," "they restrain their sorrow," "they live a child－centered life," "they want to do anything for the child," "they want to be with the child as long as possible." The student also felt the need for her as a nurse, "to reduce the physical burden of the family," "to help the family live a normal daily life," "to help the family have some free time," "help the family remain mentally stable," "to help the family remain willing to support the child's battle with cancer," "to help with the family members' expression of feelings for one another," "to encourage the family to have exchanges with other families plagued with cancer," "to get involved to help the family play their roles as family members," "to get involved to bring a smile back to the child's face." The nursing student thought that she needed to help the family reduce their physical burden, to help them live a normal daily life, and to provide mental support for all the family members, including the mother who stayed and took care of the child. The student also felt that the family members were lonely, and therefore, provided assistance to the family so that they could express their feelings for one another, urged them to have exchanges with other families in a similar situation, and helped raise the family's willingness to support the child's battle with cancer.

1）宮城大学看護学部　　Miyagi University School of Nursing

## Ⅰ．はじめに

小児がんは、治療成績の集学的治療の発展によって70%は治癒するようになり、不治の病から慢性疾患という捉え方に変わってきている。しかし、自分の子どもががんと診断された家族は、「何か未然に防げる予防策はなかったのか」「もっと早く気づくことができたのではないか」など自責の念や後悔の念をもったり、怒りを医療者に向けたり、無気力や現実から逃避するなど、様々な反応を示すと言われている。また、小児がんの診断がつくと入院し治療開始となり、その後、治療や病気の経過に不安を持ちながら、寛解にいたるまでの病院で過ごすことになる。また、子どもの入院への付き添いは母親が担うことが多く、家族内の役割や家族関係の変化、入院生活を送る上での生活の制約、就労の継続についてなど、身体的・精神的、社会的にも大きな影響を受け、小児がんの子どもの家族が危機的状況に陥ることは容易に予測できる。

Hanson[1]は、家族看護学における看護基礎教育のレベルとして、背景としての家族、あるいは社会の構成要素としての家族を対象として活動するための基礎を身に付けることと述べている。昨今の看護学生は生活体験が乏しく、また、子どもと接した経験が少ない学生は、短い実習期間の中で病気をもつ子どもと関わることを困難と感じていることも多く、前述したような小児がんの子どもと家族の状況を視野に入れながら看護援助を行っていくことは困難と感じるものと考えられる[2]。小児看護領域における実習では、病気をもつ子どもだけを看護の対象とするだけでなく、家族も含めた看護援助に必要な知識や技術の習得が必要である。そこで、本研究は、看護学生が小児がんの子どもの家族をどのように捉え、どのような看護援助の方向性を導きだしているのかを明らかにすることを目的に行った。

## Ⅱ．方　法

### 1．対　象

看護大学３年次の小児看護実習で小児がんに罹患している同一の子どもを受け持った学生４名であった。

### 2．データ収集方法

データ収集期間は、平成16年８月20日～25日までであり、小児看護実習終了後、約６ヶ月～８ヶ月を経過した後であった。

データ収集は、学生に自由回答式質問紙を配布し回収ボックスにて回収した。質問紙の内容は、家族との関係性を確立していく際の困難や戸惑い、実際の関わり、関係性の確立のための態度、家族ケアを行う際の困難感、子どもと家族の関係性に対する援助、精神面に対する援助、成長発達を促す援助、小児がんの子どもと家族に対する必要な援助の８項目であった。質問紙へ回答する場合は、小児看護実習を振り返って小児がんの子どもをもつ家族の看護援助について、どのように思ったのかとその根拠について場面を提示しながら詳細に記述するよう説明した。

### 3．分析方法

得られたデータをテキスト化し、看護学生が小児がんの子どもの家族に関わっていく際の体験・思いを抱きながら関わっているのか、小児がんの子どもの家族と関わりながら家族をどのように捉えているのか、小児がんの子どもの家族との関係性を築くための看護学生の姿勢、看護援助の方向性の４つの視点を基に、意味・内容に類似性があるものについて分類した。

### 4．倫理的配慮

研究の主旨を説明し同意が得られた学生を対象とした。質問紙への回答は無記名で、答えたくない内容については答えなくてもいいこと、プライバシーと匿名性を保持することなどを口頭と文書で説明した。また、本研究を行うにあたり、宮城大学看護学部倫理委員会の審査を受け承諾を得た。

## Ⅲ．結　果

### 1．看護学生が小児がんの子どもの家族に関わる際の思い・体験

看護学生が小児がんの子どもの家族に関わる際の思い・体験の内容は、実習期間という限られた中で〔短期間の関わりにおける戸惑い〕〔学生とい

う立場での戸惑い〕を感じながら、母親との関係性を築いていく中で、家族が想像や理解する気持ちがそこまで及ばない状況にいると捉えていた。また、家族の疲労なども考えながらも、自分の存在が親子関係に割り込んでいるのではないかと戸惑っていた。

1）〔短期間の関わりにおける戸惑い〕

「学生という立場で、また、2週間という短期間しか関われない自分がどこまで踏み込んで聞いてよいのか、受け入れてもらえるのかということに戸惑った（case 3）」

2）〔学生という立場での戸惑い〕

「学生という立場で半人前だし、未熟なので「看護師」としてアドバイスを求められたり、悩みや辛い気持ちを表出してもらえることが少なかったように思う（case 1）」

3）〔過酷な状況にいる家族の理解の難しさ〕

「母親との関係を築く上で、母親の気持ちを理解したいと思いましたが、その家族が陥っている状況がとても過酷なものであったので、自分の想像や理解する気持ちがそこまで及ばないことにも少し苦しみました（case 4）」

4）〔親子関係への割り込みの危惧〕

「子どもに対する日常の世話は、親がやるものだし、親がやるのが一番だと思う。…（中略）毎日つきっきりで、親も疲れてくるだろうし、できることなら代わってあげたいと思う。どこまで、手伝ってもいいのかというところで戸惑いがあった。あんまりでしゃばり過ぎて、親子の間に割って入るのもなんだし・・・という感じでした（case 2）」

## 2．小児がんの子どもの家族との関係性を築くための看護学生の姿勢

小児がんの子どもの家族との関係性を築くための看護学生の姿勢は、まずは〔子どもと仲良くなる〕ことを通し、〔理解しようとする〕〔家族の頑張りを認める〕〔じっくり話を聞く〕という態度で家族に対して関わり、〔家族から信用してもらう〕ことができるように関わっていた。

1）〔子どもと仲良くなる〕

「まずその子と仲良くなることが、その家族とよい関係を築くことにもつながっていくと思う（case 1）」「自分からいろいろ話をしたり、子どもと仲良くなるように一緒に遊んだりした（case 1）」「受け持ちの子が好きなキャラクターを描いたり、名前を覚えた（case 1）」

2）〔理解しようとする〕

「母親の辛い気持ちを少しでも理解したいと思い、ねぎらいの言葉をかけたり、体調は大丈夫なのかなどと、母親の気持ちを少しでも、軽くできるような言葉かけが必要だと思います（case 4）」

3）〔家族の頑張りを認める〕

「子どもと付き添っているお母さんはすごくすごく病院で頑張っていることを家族に分かってもらうことと、おうちにいる家族もすごくすごく頑張っていることをお母さんと子どもに分かってもらうこと、受け持ちの子どもの家族は、それができていて、お互いがお互いの頑張りを支えあっていた（case 1）」「元気になりたい、よくなるために家族みんなで頑張ろうという気持ちを支えるために、子どもができるようになったということを見つけて褒めることや家族の頑張りを認めることなどが大切だと思う（case 1）」

4）〔じっくり話を聞く〕

「自分の思いを話せる人がいないので、時間に余裕をもってじっくりと話を聞く姿勢を示していくことが重要だと思う（case 3）」「その家族が感じていることを共感的に聞くだけでも気分が少しは楽になると思う。実習の時には、「一人で子どもと部屋にいるといろいろ考えて、辛いこともあるから、お姉さんがいてくれて助かりました」というようなことを最後に言っていただいたので、聞いてあげるだけでもケアになるのではないかと思った（case 3）」

5）〔家族から信用してもらう〕

「お母さんに自由な時間を過ごしてもらったりと、また、身体的なサポートをしながら、信用してもらおうと思った。お母さんが私に頼みごとをしてくれるようになってから、いろいろ話ができるようになった（case 2）」

### 3．看護学生が捉える小児がんの子どもの家族の状況

看護学生は、家族は〔孤立しがち〕〔耐えがたい状況〕〔悲しみを抑えている〕という思いをもちながら、〔子ども中心の生活〕を送っており、子どもに対して〔なんでもしてあげたい〕〔一分一秒でも一緒にいたい〕と関わっていると捉えていた。

1）〔孤立しがち〕

「入院も長期にわたり、個室に入って隔離されてしまうので付き添っている家族は、孤立しがち（case 1）」

2）〔耐えがたい状況〕

「子どもの母親が一番辛そうにしていたのは、子どもの苦痛に耐えて、治療や検査を受けているときでした。自分がお腹を痛めて産んだ我が子が辛い思いをしているのは、どんな親でも耐えがたいことだと思います（case 4）」「小児がんというまだ治らない病気だというイメージが強く、絶望を感じると思う（case 3）」

3）〔悲しみを抑えている〕

「家族は、絶対、ものすごい、ショックを受けているのに、子どもの前では、「母親」「父親」役割を果たさなければいけないので、どこかで悲しみを抑えていると思う（case 1）」

4）〔子ども中心の生活〕

「子どもが入院しているときには、家族みんなが、その子どもの中心の生活になっていると思う（case 1）」「付き添いをしている母親は、常に個室に患児と2人であり、患児の体調がよくない時は、頭の中がそのことでいっぱいになってしまうし（case 3）」「家事や子育ての中心である母親が患児につきっきりになってしまう場合には、家族の機能そのものを見直さなければならない（case 4）」

5）〔なんでもしてあげたい〕

「病気のことですっかり頭がいっぱいになり、かわいそうで何でもしてあげたいと思ってしまうと、できることもさせないでいることも多いのかなと改めて思った（case 3）」「どんなに小さなことでも、子どものために何かしてあげたいという気持ちでいると思う（case 2）」

6）〔一分一秒でも一緒にいたい〕

「子どもががんだと分かったら一分一秒でも長く子どもと一緒にいたいと思うだろうし（case 2）」

### 4．看護学生が捉えた小児がんの子どもの家族に対する看護援助の方向性

看護援助の方向性として、〔家族の身体的負担の軽減〕〔家族の日常生活の保障〕〔家族に自由な時間を過ごしてもらう〕など、入院に付き添っている母親が身体的負担を軽減し日常生活を送ることができるように関わっていた。また、〔精神的安定を図る〕〔家族間の思いの表出の調整〕〔同じ疾患の家族との交流を促す〕〔家族の闘病意欲を支える〕など、精神状態の観察を行い、精神的に安定して生活していていくことができるように関わっていた。さらに、〔家族としての役割を果たすための援助〕〔子どもが笑顔になれるような関わり〕を行っていた。

1）〔家族の身体的負担の軽減〕

「家族の身体の負担を和らげることを一番に考えた（case 2）」

2）〔家族の日常生活の保障〕

「お母さんがお風呂に入っている時間は自分が見ているから安心してほしいと伝えたとき、ほっとした顔をしていた（case 2）」「母親が少しでも休めるように、ちょっと患児と離れて休憩できるように、代わりに患児の面倒を見ていました（case 4）」

3）〔家族に自由な時間を過ごしてもらう〕

「親だって、一人の人間で子どもといい関係でいるためには、自分の時間を少しでも持つことが大切だと思う（case 2）」

4）〔精神的安定を図る〕

「常に日常的な家族の言葉や態度に気をつけて、家族の精神状態をチェックしていくことが大事だと思う（case 2）」「治療薬や治癒に至るまでにかかる期間など正確な情報を与えることで精神的に安定できるように情報提供は大切だと思う（case 3）」「母親の辛い気持ちを少しでも理解したいと思い、ねぎらいの言葉をかけたり、体調は大丈夫なのかなどと、母親の気持ちを少しでも、軽くできるような言葉かけが必要

だと思います（case 4）」

5）〔家族の闘病意欲を支える〕

「家族や子どもに希望を与えつづけることも大切だと感じた。元気になりたい、よくなるために家族みんなで頑張ろうという気持ちを支えるために、子どもができるようになったということを見つけて褒めることや家族の頑張りを認めることなどが大切だと思う（case 1）」

6）〔家族間の思いの表出の調整〕

「抑えている悲しい気持ちを少しでも、表現できるように看護師は家族に話し掛けたりして、信頼関係を築いたりして、話す機会をつくることが必要だと思う。また、家族同士でも思いを表出しあえるように調整することも必要だと感じた（case 1）」

7）〔同じ疾患の家族との交流を促す〕

「（同じ疾患の）Bちゃんのお母さんと友達になることでいろんな思いを共有して、励ましあっていた。同じ状況に置かれた人がそばにいるのはとても心強いものだから、そういう親たちが悩みを相談し会えるような場を作ることが大事だと思う（case 2）」

8）〔家族としての役割を果たすための援助〕

「お母さんが積極的にトイレットトレーニングや歩く練習をさせていたので、あえてこちらが何かを促すことはしなかったけど、こちらが子どものできることを発見して、親に伝えて「この子は病気だけどちゃんと成長しているんだ！」と思えるようにすることが大切である（case 2）」

9）〔子どもが笑顔になれるような関わり〕

「子どもに少しでも笑顔になってもらうことが大切だと思う。私は、子どもが好きなキャラクターを書いたお薬表や紙芝居を作ったり、点滴ボトルに絵を書いたりして、Aちゃんが少しでも、たくさん笑ってくれるように関わった。Aちゃんの笑顔はお母さんの笑顔の源（case 2）」「Aちゃんが機嫌がいいとお母さんも世話をする時に楽になるので、子どもが少しでも「うれしい」と思う機会を増やしてあげることが大事（case 2）」

## Ⅳ. 考　察

1）看護学生が小児がんの子どもの家族を捉える際の思い・体験と関係性を築く際の態度

小児がんの子どもの家族と関わる際に看護学生は、短い実習期間の中でどこまで踏み込んでいいのか、受け入れてもらえるのかと戸惑いを感じていた。看護学生は、家族との関わりの中から家族を過酷な状況にいると判断し、家族から信用を得ることができるように、家族を理解し、子どもと子どもに付き添っている母親だけでなく、家族全員の頑張りを認めながら、家族と関係性が築けるように関わっていた。野嶋[3]は、家族とのパートナーシップ構築のために看護者に求められているものについて、信頼される存在になること、家族に適合したパワーや責任の分配が可能となるように交渉・合意し続けること、看護者としてのあり方を洞察し続けることなどをあげている。また、渡辺[4]は、パートナーシップ確立を阻害する要因として、患者の人生、家族の生活を思い描く想像力の不足、あいまいさや不確実さに耐える能力を育成されにくい現状、看護者としてのアイデンティティの未確立などをあげている。小児がんの子どもの家族が置かれている状況について、看護学生は、「状況がとても過酷なものであったので、自分の想像や理解する気持ちがそこまで及ばないことにも少し苦しみました（case 4）」と述べているが、関係性を築くためには、患者の人生、家族の生活を思い描く想像力を高め、全体としてありのままに理解する能力の向上が大切であるといえ、子どもと家族の置かれている状況を察する能力や看護職者の役割などについて指導していくことが重要であるといえる。受け持ちが決定した段階で、小児がんの子どもと家族の全体像を早期に捉えられるように、小児がんの子どもの家族の特徴を説明し、限られた実習期間の中で優先して援助していく内容、学生の学びたいことなどをもとに重点的に関わっていく方向性について考えていくことができるように指導していくことが重要である。また、「学生」だからということを意識しながら小児がんの子どもと家族と関わっていることが窺えるので、学

生という立場でもできること、学生の立場だからできることを学生とともに考え、看護援助を実践していくことができるように指導していくことが、学生の実習に対する動機付けにも有効的に働くものと考える。

また、看護学生は、家族への看護援助を行っていくために、子どもとの関係性を築き、家族から信用を得ることができるように、家族を理解し、子どもと子どもに付き添っている母親だけでなく、家族全員の頑張りを認めながら関わっていた。柴[5]は、小児看護学実習において学生は受け持ち患児と関係形成を行っていく際に、まず受け持ち患児と関わっていくための手かがりを見つけようとし、患児の興味を探り、融和化を図っていたと述べている。看護学生は、受け持ち患児との関係形成を行う場合と、ほぼ同じプロセスを踏み、小児がんの子どもの家族と関係性を築いていたものと考えられる。臨床の看護師であっても、母親の存在の大きさや母親から見られているという思いなどから、母親との関わりを苦手とすることが多く居場所がないと感じたり、自信をなくす場合もあると言われている。看護学生は子どもや母親と一緒にケアに取り組んだり、遊びを通しながら子どもと関係性を築き、母親から信頼され認められることで居場所を確保できたと感じていたのではないかと推察される。

2）看護学生が捉えた小児がんの子どもの家族の状況と看護援助の方向性

看護学生は、小児がんの子どもの家族の状況を〔孤立しがち〕〔耐えがたい状況〕〔悲しみを抑えている〕〔子ども中心の生活〕〔なんでもしてあげたい〕〔一分一秒でも一緒にいたい〕と捉えていた。そして、小児がんと診断され、規制が多い入院生活の中で、治療・検査・処置が多い生活を余儀なくされている小児がんの子どもと付き添っている家族を視野に入れ、子どもと遊びを通して、子どもとの関係性を築きながら、家族のニーズも満たしていくことができるように両者に対して関わっていることが推察された。小児がんの子どもの家族がおかれている状況を耐えがたい状況と捉えながら、じっくり話を聞いたり、家族の頑張りを認めながら家族を理解しようしていることが窺える。

小児がんの子どもと家族の生活の質は、〔子ども中心の生活〕となり、入院生活を送っている家族と、家に残された家族の２家族となり低下することが多い。小児がんの子どものために〔なんでもしてあげたい〕〔一分一秒でも一緒にいたい〕と、身体的にも精神的にも多少の負担や無理を感じながらも、小児がんの子どもの世話をしていることが多い。そのため、看護学生は、付き添っている家族の日常生活を保障したり、付き添っている母親にとって自由な時間が必要であると判断し援助していた。また、家族の頑張りを認めたり、時間に余裕をもって話をじっくり聞きながら援助していた。また、付き添っている家族の精神的援助だけでなく、家族員全員に対しても関わる必要性があると判断していることも窺える。

さらに、同じ疾患の子どもの家族との交流など、孤立しがちな小児がんの子どもの家族の状況も捉えた上で援助の必要性を導き出していると推察される。また、小児がんの子どもと家族の相互作用についても理解し、子どもが笑顔になることで家族の頑張りを認め、さらに、闘病意欲の向上にまで影響があることを考え、援助していたことが推察される。

## Ⅴ．まとめ

1．看護学生は、小児がんの子どもの家族と関わっていく際には、〔短期間の関わりにおける戸惑い〕〔学生という立場での戸惑い〕〔親子関係への割り込みの危惧〕〔過酷な状況にいる家族の理解へ難しさ〕を体験しながら、〔子どもと仲良くなる〕〔理解しようとする〕〔家族の頑張りを認める〕〔じっくり話を聞く〕〔家族から信用してもらう〕ことを通して、家族と関係性を築き、看護援助を行っていた。

2．看護学生は、小児がんの子どもの家族の状況を、〔孤立しがち〕〔耐えがたい状況〕〔悲しみを抑えている〕〔子ども中心の生活〕〔なんでもしてあげたい〕〔一分一秒でも一緒にいたい〕と捉

え、家族の日常生活を保障し、自由な時間を過ごしてもらうように援助していた。また、付き添っている家族の精神的安定を図るだけでなく、家族全員に対しても援助していく必要性があると捉えていた。さらに、小児がんの子どもの家族が孤独な状況におかれると推察し、家族同士の思いの表出や同じ疾患の家族との交流を促したり、闘病意欲を支えることができるように援助していた。

## 謝　辞

本研究に協力いただきました学生の皆様に心より感謝いたします。

なお、本研究は、第19回日本がん看護学会学術集会で発表したものに加筆修正を加えたものである。

## 文　献

1）Shirley May Hanson（村田恵子・荒川靖子・津田紀子監訳者）：家族看護学－理論・実践・研究．pp．28－29，医学書院，東京，2001

2）西田みゆき：小児看護実習における学生の困難感．順天堂医療短期大学紀要，14，44－52，2003

3）野嶋佐由美：家族とのパートナーシップ構築の方略．家族看護，4（1），6－13，2006

4）渡辺裕子：患者・家族とのパートナーシップ確立を阻害する要因と課題．家族看護，4(1)，14－19，2006

5）柴邦代：小児看護学実習における学生と受け持ち患児との関係形成プロセス．看護研究，38(59)，51－64，2005